

## ＜原著論文＞

## 個人と共同体の混合形態

## ——一人暮らし高齢者の生活——

Mixed Forms of Individuals and Communities:  
Lives of Elderly People Living Alone

船木 祝<sup>1)</sup>, 宮嶋 俊一<sup>2)</sup>

Shuku FUNAKI, Shunichi MIYAJIMA

山本 武志<sup>1)</sup>, 栗屋 剛<sup>3)</sup>

Takeshi YAMAMOTO, Tsuyoshi AWAYA

1) 札幌医科大学 (Sapporo Medical University)

2) 北海道大学 (Hokkaido University)

3) 岡山商科大学 (Okayama Shoka University)

## 要旨

本研究では、配偶者の死別後等の一人暮らし生活へ的高齢者の個人の馴化のプロセスを明らかにし、さらに、周囲の人とのコミュニケーションや交流のあり方を描写することを目指す。この問題に取り組むために、北海道在住の65歳以上90歳未満の一人暮らし高齢者24名を対象とするインタビューガイドを用いた半構成的面接調査を実施した。このインタビュー調査に基づく逐語録は質的帰納的方法によって分析された。

分析の結果、最終的に、高齢者の一人暮らし生活を支えている精神的・社会的状況に関して、10のカテゴリーと25のサブカテゴリーとに集約できた。自己との関係に関しては、【死別後の変化】、【時間とともに変化する】、【人生を変えた大きな出来事】、【自分で作る・夢中になれる趣味がある・仕事がある】の4つのカテゴリーが得られた。他者との関係に関しては、【気持ちを支えてくれる関係】、【喜びとなる人との交流】、【人から離れる】、【つながりを見つける】、【人とのつきあい方】、【重要な他者の存在】の6つのカテゴリーが得られた。

これらの結果から、一人暮らし高齢者は自己との関係において他者の存在を思い浮かべ、他者との関係において自己の自発的意思を表明していたことが示された。すなわち、個人の問題と共同体の問題は単に二分化できるものではなく、相互的影響を顧慮して考察されなくてはならないことが明らかになった。

## Abstract

In the present study, we focus on the question as to how the elderly living in solitude better accept their present situation and build relations with others. To examine these issues, semi-structured interviews were conducted with 24 elderly persons (ages 65-89). The transcripts from these interviews were analyzed through a qualitative-inductive approach.

We were able to classify the obtained information into ten categories. Four of these concerned their self-relations: (1) Changes after one's bereavement; (2) changes with time;

(3) past events that changed their life style and (4) creative ability, absorbing oneself in a hobby and performing various tasks. Concerning relations with others, six categories could be noted: (5) Relations that provide encouragement to the elderly; (6) joyful interactions with other people; (7) becoming more distant from others; (8) finding connections with others; (9) ways of improving relationships with others and (10) the presence of significant others.

The analysis provided suggests that the elderly imagine others while they grapple with their own problems, and at the same time express spontaneous intentions concerning their relations with others. The issues regarding independent individuals and various communities cannot be easily differentiated, but their mutual influence should be considered.

Keywords : 一人暮らし高齢者 (elderly living in solitude) 個人 (individuals)  
共同体 (community) 自己との関係 (self-relations)  
他者との関係 (relations with others)

## I. はじめに

総務省「自治体戦略2040構想研究会」中間報告(2018年)によれば、2040年の高齢化率(65歳以上人口が総人口に占める割合)は現状の27.7%から、35.5%に増加する見通しである<sup>1)</sup>。一人暮らし高齢者は、総務省統計局国勢調査(2010年)によると、65歳以上人口のうち16.4%となっている<sup>2)</sup>。国立社会保障・人口問題研究所の推計(2018年)によれば、2040年の65歳以上の独居率は、男性で2015年の14.0%から20.8%へ、女性で2015年の21.8%から24.5%へ上昇する見通しである<sup>3)4)</sup>。超高齢社会を迎える日本において、孤立した一人暮らし高齢者を支援することは喫緊の課題である。

船木・山本・栗屋らの研究グループは、2013年～2014年に、A市及びB市在住の65歳以上の一人暮らし高齢者男女各6名計12名を対象とする質的記述的研究を行った。札幌医科大学倫理委員会の承認を得て、調査依頼の同意が得られた方に対して、一人暮らしの生活における精神的・社会的状況についてのインタビューガイドを用いた半構成的面接調査を実施した。その結果、一人暮らし高齢者は、比較的活動可能な時期から、徐々に自立能力を失っていく過程を歩んでおり、このプロセスの中で、絶え間ない自己及び他者との関係を続けていることがわかった。当時の調査研究では、独居年数の平均が17年であり、困難な時期をすでに乗り越えてきた高齢者を調査対象者とした。調査対象者の平均年齢は77.8歳であった<sup>5)</sup>。本研究では、研究グループのメンバーに宮嶋を加え平均独居年数10年以内の高齢者に対するインタビュー調査をすることにより、一人暮らし生活の困難な時期の状況を明らかにする。また、本研究では、団塊世代をより多く含む新たな高齢者群を調査研究することにより、これまでとは異なる戦後世代の高齢者像を描写することを目論んでいる。さらに、本研究では、A市(都市部)、B市(道北)だけではなく、C市(道東)、D町(道央)にまで調査対象地域を拡げ、北海道のより広範な地域の一人暮らし高齢者の精神的・社会的状況を明らかにすることを目指す。また、船木(2018)では、当該調査に基づく事例研究がすでに報告されているが<sup>4)</sup>、それは共同体形成に関する哲学的考察と関係性があるところの、それぞれの地域の研究参加者10名の語りの部分のみに注目したものであった。本稿は、全体的、多角的視点から24名の研究参加者の精神的・社会的状況を示すカテゴリー、及び項目の構造の一端を明らかにすることを目的としている。双方の論文の研究参加者に付した( )内のローマ字にも整合性はない(注1)。本稿では全体的考察をした結果、これまで得られなかった

知見が得られたと考える。

一人暮らし高齢者の絶え間ない内面的な自己との関係を経て生み出されるプロセスを念頭に置かなければ、個人の自律原則の促進を最上位の課題に置くアメリカ型生命倫理に基づく「自律パラダイム (autonomy paradigm)」が規範として示される。これに対し、誰もがいずれ生活習慣病にかかったり、仕事がなくなったり、配偶者や家族を亡くしたりしてもおかしくはないという、人間存在の「脆弱性 (vulnerability)」を基軸に置く倫理を示す、欧州連合「生命倫理と生命法における基礎的倫理的原理」に関する宣言である「バルセロナ宣言」(1998年) が注目される<sup>5)6)7)8)</sup>。この倫理的原理は、家族と離れざるをえない状況に置かれると一層傷つきやすい者となる一人暮らし高齢者を共同体としてどのように支えていけばいいかという、もう一つの視点を提供する。ジョン・スチュアート・ミル (John Stuart Mill) の『自由論』(1859) を代表例とするようなリベラルな個人主義を標榜する前者に対して、「人を周囲の人々と本質的に結びついた存在としてとらえる」チャールズ・テイラー (Charles Taylor) などの共同体主義者、アリストテレスの「徳」倫理学に即して、現代の諸問題を再考しようとするマーサ・ヌスbaum (Martha C. Nussbaum) のようなアリストテレス派の倫理学者は共同体のあり方を問う姿勢を持つ (注2)。日本では古来の村落共同体の観念が崩れ、個人の恣意がはびこり、共同体意識を見失っている風潮もあるが、その一方で東日本大震災の折には、「きずな」ということが叫ばれ、困難な状況下、お互いに助け合おうという潜在的に隠れている気持ちが表面化した<sup>4)</sup>。一方、個人と共同体との二元的対立軸からだけでは分析しきれない側面があるのではないかという視点も必要になる。個人の内面的作業の中に他者意識が強くなり、共同体形成に向けて個人の自発的意思表明が強くなる側面もあるのではないかと考える。

個々の高齢者に横断的に認められる何らかの共通性など、一人暮らし高齢者の流動的な現状を把握する必要があると考えられる。配偶者の死別後等の心境、その後の時間の経過にともなう変化の具体的実情を把握し、また、過去を振り返るなどの内面的作業や個人の生活の工夫といった一人暮らしへの馴化のプロセスを明らかにし、さらに、周囲の人とのコミュニケーションや交流のあり方を描写するために、インタビュー調査を基にした質的研究が重要であると考えられる。

## II. 目的

北海道A市(都市部)、B市(道北)、C市(道東)、さらにD町(道央)在住の一人暮らし高齢者に関する実態調査をし、近年増加しつつある一人暮らし高齢者の精神的・社会的状況の現状を把握するための指針となる構造の一端を明らかにする。

## III. 方法

### 1. 研究デザイン

質的記述的研究

### 2. 研究参加者

北海道A市、B市、C市及びD町在住の65歳以上90歳未満の一人暮らし高齢者24名を対象とする。A市の診療所に通う患者、B市のNPO法人による学術研究を通じた健康維持増進・地域支援活動団体の利用者、C市の介護予防、認知症予防のための網を使った運動教室を通じたNPO法人による地域の健康増進活動団体の利用者、D町の有床診療所の患者など各6名ずつ計24名である。自分の思いを語ることに支障があると考えられる医療依存度の高い独居療養者、及び認知症高齢者は調査対象候補者から除外した。

### 3. インタビュー期間

2016年9月～2017年6月

### 4. インタビュー方法

A市の診療所、B市のNPO法人による学術研究を通じた健康維持増進・地域支援活動団体、C市の介護予防、認知症予防のための網を使った運動教室を通じたNPO法人による地域の健康増進活動団体、D町の有床診療所から調査対象者を紹介していただいた。個別訪問もしくは調査対象者の希望する場所（居宅や公共スペースなど）に、研究グループのメンバー2名が紹介看護師、介護支援専門員、もしくは病院職員とともに訪れ、調査の目的の説明をしたうえで、研究調査への参加同意書を得た。同意が得られた方に対してのみ、一人暮らしの生活における精神的・社会的状況についてのインタビューガイドを用いた半構成的面接調査を実施した。面接内容は研究参加者の了承を得て録音した。面接時間は平均45分（30分～65分）であった。

インタビューは、基本的事項の他、現在の状況、過去の思い出、日々の工夫、周囲との関係などについて語っていただいた。また相互的な話の流れで、自由に語っていただいた。

### 5. 分析方法

面接で得られた録音テープから逐語録を作成し、まず、逐語録を繰り返し読み返し、語られている内容をコード化した。次に共通内容をもつコードをまとめたものを集約しサブカテゴリーを形成した。そして、サブカテゴリーの中から研究参加者の体験や思いを代表する主要な概念を抽出し、カテゴリーとして分類した<sup>9)</sup>。

分析結果に発言や意図が正しく表されているか、研究グループのメンバー間で合意が得られるまで検討し、妥当性の確保に努めた<sup>10)</sup>。

### 6. 倫理的配慮

札幌医科大学倫理委員会の承認を得たうえで研究に着手した（2016年8月15日、承認番号：28-2-28）。研究参加者には、研究の目的及び方法、協力の任意性と撤回の自由、個人情報保護、研究成果の公表について文書と口頭で説明し、書面で同意を得た。

面接時はプライバシーに配慮し、また、調査に関する資料は、厳重に管理した。使用するコンピューターは、パスワードにて管理され、本研究の実施責任者及び実施分担者のみが使用した。データベースはすべて暗号を付けることで匿名化し、情報が漏洩しないように厳重に管理した。データの保管にはインターネット環境のないコンピューターを用いた。紙媒体は研究代表者の研究室の鍵のかかるキャビネットに保管した。面接調査については、身体的危険性は存在しないが、面接時の対象者の疲労や心理的負担が引き起こされる可能性がある。インタビューに際して、緊急の支援が必要と思われた場合には、可能な限り本人の同意を得て、主治医やその地域の地域包括支援センターなどに連絡できる体制をとった。

## IV. 結果

### 1. 研究参加者の基本属性（表1）

研究参加者の年齢は65歳から88歳で、平均年齢は73.8歳であった。独居年数は2年から45年で、平均独居年数は7.5年であった（未婚は除く）。

### 2. 分析結果

分析の結果、最終的に、高齢者の一人暮らし生活を支えている精神的・社会的状況に関して、10のカテゴリーと25のサブカテゴリーとに集約できた（表2）。以下、カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは〔 〕で示す。「 」は研究参加者の言葉である。その語りの中にある（ ）内は、筆者の補足したものである。（ ）内のローマ字は事例を示す。

表1 研究参加者の基本属性

事例	年齢	性別	地域	独居歴	独居のきっかけ
(A)	70代	男性	A市	6年	妻との死別
(B)	70代	男性	A市	3年	妻との死別
(C)	70代	女性	A市	20年	親との死別
(D)	70代	女性	A市	4年半	夫との死別
(E)	70代	女性	A市	3年	夫との死別
(F)	70代	男性	A市	45年	離別
(G)	60代	男性	B市	6年	母親の施設への入所
(H)	60代	男性	B市	5年	妻との死別
(I)	70代	女性	B市	1年	夫との死別
(J)	70代	女性	B市	1年10ヶ月	夫との死別
(K)	70代	男性	B市	2年	妻との死別、娘の独立
(L)	70代	女性	B市	2年3ヶ月	夫との死別
(M)	70代	女性	C市	36年	夫との死別
(N)	70代	女性	C市	13年	夫との死別
(O)	70代	女性	C市	2年3ヶ月	夫との死別
(P)	80代	女性	C市	2年4ヶ月	夫との死別
(Q)	80代	女性	C市	3年	夫との死別
(R)	80代	女性	C市	1年半	夫との死別
(S)	60代	男性	D町	未婚	未婚
(T)	70代	女性	D町	1年	夫との死別
(U)	70代	女性	D町	4年	夫との死別
(V)	70代	女性	D町	2年半	夫との死別
(W)	80代	男性	D町	3年	妻との死別、息子との死別
(X)	60歳代	男性	D町	3年半	妻との死別

表2 一人暮らし高齢者の置かれている精神的・社会的状況

カテゴリー	サブカテゴリー
【死別後の変化】	[経験しないとわからない] [生活が変わった] [思い出の場所に行けなくなった]
【時間とともにう変化】	[辛い気持ちが薄らぐ] [紛らわすことはできる] [誰もが経験することの受容]
【人生を変えた大きな出来事】	[できる範囲のことをする] [人生の財産である・何があっても大丈夫]
【自分で作る・夢中になれる趣味がある・仕事がある】	[日々の楽しみがある・家にいても退屈しない] [仕事があったから救われた]
【気持ちを支えてくれる関係】	[おしゃべりは大切] [何気ない話ができる・気にかけてくれる人がいる]
【喜びとなる人との交流】	[人に喜ばれる喜び] [若い世代との交流]
【人から離れる】	[いじめは恐ろしい] [文句を言われる] [病気になった]
【つながりを見つける】	[以前からの知り合い] [町のサークル] [サークルを作ろう]
【人とのつきあい方】	[自分から動く] [人のことには立ち入らない] [分け隔てがない・イニシアティブをとる人を助ける]
【重要な他者の存在】	[少数の親密な関係] [遠くの親戚より近くの他人]

### (1) 【死別後の変化】

このカテゴリーは高齢者が死別後どのような心境を持ったか、また行動や生活にどのような変化があったかに関係する。死別は「経験しないとわからない」と捉える高齢者がいた。また、不眠、暴飲暴食などの生活上の変化を話す高齢者と、「思い出の場所に行けなくなった」と行動の変化について話す高齢者がいた。以下、とくに注目すべき語りの箇所には下線を付した。

#### ① 「経験しないとわからない」

夫を病死で亡くし、1年10ヶ月の間一人暮らしを続けていた研究参加者(J)は、死別後の心境を、「自分は夫を亡くしてはじめて、はーって、こんなに大変なんだなっていうことを感じました」「なんというか、まあ、羽をものがれたような感じになってしまいました」と述べた。それまで死別の辛さがこんなに大変なものであるとは思っていなかったという。妻との死別後、3年半一人暮らしをしてきた研究参加者(X)も、「真っ暗な状態に帰ったときに、家にも電気ついてないと、そういう中で生活というのは、ちょっと経験したことなかったんで、やっぱり、何というか、ちょっと言葉ではなかなかうまく言えなんですけどね」というように、これまで経験したことのなかった寂寥感について語った。

#### ② 「生活が変わった」

また上述の研究参加者(J)は、「夜が全然眠れないので、たぶん今も同じ状況で」と語った。妻と死別し、5年間一人暮らしを続けてきた研究参加者(H)は、「暴飲暴食ちゅうの？……家内といたときよりは増えた。誰も止める人がいないから」と述べた。同研究参加者は、「釣りも好きだったんだけど、釣りもやめちゃった」、そして「(質問者)今も山菜採りにいかれるんですか」と尋ねると「もう行かなくなっちゃった」と述べた。夫が病死した後、2年3ヶ月の間一人暮らしを続けていた研究参加者(L)は、「あのひとりになったときね、私自分で変だなと思ったのはね、物を買うときにね、多く買うんです」「なんかしゃべれなくなったみたいな？一時あったんです」と語った。

#### ③ 「思い出の場所に行けなくなった」

夫を病気で亡くし、2年半一人暮らしをしている研究参加者(V)は、「温泉なんか、最初はしばらく行けなかったです。毎日二人で行っていたからね。温泉も全然行けなかったのね」と述べた。

このように、死別後の心境は、当事者も「経験しないとわからない」ほどの喪失感がある。生活面においても不眠、暴飲暴食、趣味をやめる、物を多く買う、話せなくなるといった変化を経験する高齢者がいたことがわかる。また、行動面においても「思い出の場所に行けなくなった」高齢者がいた。

### (2) 【時間にもなう変化】

このカテゴリーは、ひとり暮らし生活が経過する中で、心境にどのような変化があったかに関係する。時間が経過する中で、高齢者は死別後の辛い気持ちに変化が出てくるのを経験する。また、死生観における変化を経験する高齢者もいた。

#### ① 「辛い気持ちが薄らぐ」

同居していた母親が施設に入所してから6年間一人暮らしをしている研究参加者(G)は、「かれこれ5年経って少しは薄らいできたってとこかな」と語った。妻と死別し、3年間一人暮らしをしている研究参加者(B)も、「それは思い出すことは思い出すけどね。最初1年間は寂しかったけど、もう3年過ぎるとね」と述べ、時間の経過とともに少しずつ「辛い気持ちが薄ら」いでいったという。

## ②〔紛らわすことはできる〕

研究参加者（J）は、時間とともに生じる心境の変化を、「ちょっと辛い分うまくごまかして生きていける」「失ったもののなんというか喪失感とかそんなのが解決されるんじゃないくて、……紛らわすことはできた」ものとして捉えている。必ずしも喪失感がなくなるのではなく、その感情を〔紛らわ〕しながら折り合っているようになったということである。

## ③〔誰もが経験することの受容〕

研究参加者（V）は、「やはり時間が解決してくれるんだなってね。ちょうどきょうは父さんの日だもんね。……本当に、いずれは一人になるんですよ」と述べ、死という〔誰もが経験することの受容〕をしようとしていた。

このように、時間の経過とともに高齢者の心境に変化があることがわかる。当初の〔辛い気持ちは薄らぐ〕。しかし、喪失感そのものがなくなるわけではない。その感情と折り合いをつけながら生活を営んでいる様子がかがえる。また、死が〔誰もが経験すること〕として、死生観に変化を与えることにより、死別を受容していることがわかる。

## （3）【人生を変えた大きな出来事】

このカテゴリーは、過去の一命を取りとめたり苦勞したりした体験を思い出すことが、高齢者にとり一人暮らしの生活に順応する契機になっていることに関係する。また、こうした過去の経験が、これからの生活を続けていくうえでの支えになっていると語る高齢者がいた。

## ①〔できる範囲のことをする〕

研究参加者（G）は、「入院したよ。ケガ。交通事故」「こんなことっていうより、身体がもつのかっていう。それが一番心配」と語った。妻と早くに死別し、その後同居していた娘が独立してから、2年間一人暮らしを続けていた研究参加者（K）は、「（脳血管疾患のため）99.9%までだめだって言われてたのが、一命取りとめまして」「何でもね、身体動かさなくてもやれるようなものがあつたらやってみようって気持ちでいるから」と述べた。

## ②〔人生の財産である・何があっても大丈夫〕

夫と死別し、4年半一人暮らしをしてきた研究参加者（D）は、苦勞した夫の介護について、「何か今となったら財産だったかなって、それが。誰も経験してないことを私は経験できたから」と述べた。夫との死別後、3年間一人暮らしをしている研究参加者（E）は、いろいろな仕事を、働きづくしの人生を振り返り、今では「何があっても生きると思います」と語った。

このように、事故や大病の経験を通して、高齢者が身体に負担がかからないように〔できる範囲のことをする〕といった生活上の心がけをするようになっていくことがわかる。また、大変だった介護や仕事上の過去における苦勞が、高齢者にとり〔人生の財産〕になったり、〔何があっても大丈夫〕という意識につながっていることがわかる。

## （4）【自分で作る・夢中になれる趣味がある・仕事がある】

このカテゴリーは、高齢者が個人の作業としてどのような工夫をしているのかに関係する。物を作ったり、夢中になれることや仕事があることで、気持ちが軽くなると語る高齢者がいた。

## ①〔日々の楽しみがある・家にいても退屈しない〕

研究参加者（L）は、「今ね、畑作ってるんです。……で、結構そこやってるとね、忙しいっていいのか楽しいです」と、畑仕事に〔日々の楽しみ〕を見出していた。研究参加者（K）は、「趣味はね、絵を描くこと。漫画から何から、あの自分でね、年賀状っていうのあるしょ？」と語った。また上述の研究参加者（L）は、「漢字100選ってやつ。あれが結構なかなかくせものでね。でも結構面白いんですよ」と語り、他にも、夫との死別後、1年間一人暮らしをしている研

究参加者 (T) も、「クロスワードやったり、あとちょっと洋裁するので」と述べ、一人〔家にも退屈しない〕工夫をしていた。

②〔仕事があったから救われた〕

夫を病気で亡くし、1年間一人暮らしをしている研究参加者 (I) は、仕事があって「もう完全にぐーって押し込まないで済んだかなと思います」と語った。夫との死別後、36年間一人暮らしを続けてきた研究参加者 (M) は、「仕事終わって、晩御飯の支度は親のところに行って、……じゃあ寝るだけといった感じで、何も寂しい思いはしなかった」と述べた。また、研究参加者 (X) は、「ここの職場というか、こういう仕事をしてなかったら、勤めていなかったら、自分もどうなっていたか、今はちょっと想像つかないですね」と語った。

このように、高齢者は一人暮らしをしていくうえで、自ら生活を組み立てていることがわかる。畑仕事での草花とのつながりを通じて〔日々の生活に楽しみ〕を見出したり、絵画や漢字ドリルやクロスワード、洋裁といった一人でできる作業をすることで〔家にも退屈しない〕工夫をしていることがわかる。また、仕事に出かけることによって、ひとつのことに思いが入っていかないように助けられていることがわかる。

(5)【気持ちを支えてくれる関係】

このカテゴリーは、高齢者が一人暮らしになることで痛感する、人とのコミュニケーションやつながりの大切さに関係する。

①〔おしゃべりは大切〕

夫との死別後、20年間一人暮らしを続けてきた研究参加者 (C) は、「でもね、何ぼあれでもね、たまにはしゃべらなきゃだめだよ」と語った。夫を急に亡くし、その後2年3ヶ月の間一人暮らしを続けていた研究参加者 (O) は、「テレビばかりあれではダメだなと思ひまして、まゝ家に一人でいても会話もないね」「やはり外へ出ないでテレビとかラジオも聞きながらするとね、やはりコミュニケーションが大事」と述べた。

②〔何気ない話ができる〕〔気にかけてくれる人がいる〕

研究参加者 (J) は、家に来てくれる人との「何気ない話でも気持ちが楽になる」と語った。研究参加者 (L) は、近所の人から朝、「カーテンが開かなかったらどうしたんだろうって」〔気にかけてくれる〕ことがありがたいと述べた。

このように高齢者は家に一人いる時間が増えると、人との〔おしゃべりが大切〕だと強く感じるようになっていく。高齢者は何も大がかりな対話の場でもなく、ちょっとした〔何気ない話〕でも気持ちが和らいでいることがわかる。また近所の人とのさりげない気づかいが支えになっていることがわかる。

(6)【喜びとなる人との交流】

このカテゴリーは、高齢者が人とのどのような交流に喜びや生きがいを見出すかに関係する。ボランティアなどを通じて人に喜んでもらうことや、世代の異なる人たちとの交流に楽しみを感じる高齢者がいた。

①〔人に喜ばれる喜び〕

研究参加者 (K) は、「たばこのポイ捨ていっぱいあるわけさ。……今は枯れ葉、それを拾って」いて、「いつもきれいにしてもらってありがたいって」と言われるのがありがたいと語った。夫と死別し、13年間一人暮らしを続けていた研究参加者 (N) は、「教えたり、無料奉仕ですけどね。行ったりやっています。だから嫌なことがあったけど、楽しい」と述べた。



## ②〔若い世代との交流〕

夫との死別後、1年半一人暮らしをしている研究参加者（R）は、歌や踊りの会で「大体いつも来るのは、7、8人から10人、もっといるんですけど、一回り下ぐらいの人たちがいて、それが大会に行ったりなんかするんで、……手助けを決めて。一回り違う。12違うんだよ」と述べ、〔若い世代との交流〕に生きがいを感じていた。

このように、高齢者はいくつになっても周りの人に役に立つことで〔喜ばれることに喜び〕を感じていることがわかる。また、ともに活動する〔若い世代との交流〕を通じて生きがいを感じていることがわかる。

## （7）【人から離れる】

このカテゴリーは、高齢者がどのようなことをきっかけとして人との集まりから離れていくのかに関係する。グループ内でのいじめや、よかれと思ってすることで文句を言われたことや、元気なうちは集まっていた集まりが病気になったとたんになくなったことについて語る高齢者がいた。

## ①〔いじめは恐ろしい〕

研究参加者（N）は、通っていた習い事の教室でのいじめやうわさに苦しんだ経験について語った。「いじめは私は恐ろしい。大人なのに。そうやっていじめた人って自分がいじめたことはわからないんですもんね」「……というのは誰にも言ってなかったのがみんな知っているんですよ。その人たちが言って歩いて。……すごく寂しくて嫌な……」。

## ②〔文句を言われる〕

妻と死別し、6年間一人暮らしを続けている研究参加者（A）は、一人暮らし高齢者を見守る推進委員をやっていた頃の経験について語った。「元気でやってるかな？話し相手になってあげるかな？ということで行くんでしょうけど。それでも文句を言う人がいるって言うからね」と。それで支援活動から身を引いたという。

## ③〔病気になった〕

夫を病気で亡くし、2年4ヶ月の間一人暮らしをしている研究参加者（P）は、その人が病気になる前は集まっていた会が、病気になってからはなくなったことについて語った。「病気になる前は、何だかいっぱい集まってきているなと思ったら、集会なのかしらね。何か、集会だか、勉強会だかと言っていましたよ」と。

このように、人との集まりや地域活動から離れていく高齢者がいる。〔いじめ〕やうわさがあったり、よかれと思ってすることで〔文句を言われ〕たり、仲良くしていたが〔病気になった〕りすることがそのきっかけになっていることがわかる。

## （8）【つながりを見つける】

このカテゴリーは、高齢者がどのようなことをきっかけとして人とのつながりを見出しているか、また、どのようにして人との交流の場を築いているかに関係する。元々の知り合い、趣味の集まり、自治体によるさまざまなサークルを通じて活動の場を見つけている高齢者がいた。また、自分たちで人が集えるサークルを作ったと語る高齢者もいた。

## ①〔以前からの知り合い〕

研究参加者（C）は、「もとの近所の人と年に5回ぐらい温泉に行くんですよ」と述べた。研究参加者（P）は、これまでずっと続けてきた洋裁を通じての仲間について、「ですから、お友達もたくさんいますので、そのつながりがいまだにありますのでね」と語った。

②〔町のサークル〕

研究参加者 (P) は、介護予防、認知症予防のための網を使った運動教室について、「そして、お友達に会う。そして、会っているいろんなお話を聞いたりして、『あらっ』て吸収する面もたくさんありますしね」と語った。研究参加者 (T) は、「D町はもう参加しようと思えばいろんなサークルがいっぱいあるんです」と述べた。夫との死別後、4年間一人暮らしをしてきた研究参加者 (U) は、「余所のうちに行くといいこと言わないのね、なんとなく人のあら探ししてみたりね、面白いこともあるんだけどね。……なるべくただ、……グループみたいのには入って、遊ぼうかなって」と述べた。

③〔サークルを作ろう〕

研究参加者 (M) は、「『このままじゃもったいないから、なんかみんな女性だけのサークルつくらない?』って言ったら、『作ろう作ろう』ということで。そして、言い出しっぺが私で、\*\*\*の会って……。2週間にいっぺんずつ金曜日にやっているんですよ」と述べ、自分たちで料理サークルを作ったことを語った。

このように、高齢者は〔以前からの知り合い〕、趣味のサークル、自治体の運営する〔町のサークル〕を通じて、交流の場を見出そうとしていることがわかる。そうした気楽な関係が、高齢者が入って行きやすい場であるといえる。また、自分たちで〔サークルを作ろう〕と声をかけるような高齢者もいる。イニシアティブをとる人がいれば、そこを起点に人の集まりが自然発生的にできていることがわかる。

(9)【人とのつきあい方】

このカテゴリーは、高齢者が人とのつきあいにおいて、どのようなことに注意したり、心がけているかに関係する。あいさつなど〔自分から動く〕ようにしていたり、あまり〔人のことに立ち入らない〕ように心がけている高齢者がいた。また、誰かが何かを始めようとしたときに手伝おうと心がける高齢者がいた。

①〔自分から動く〕

研究参加者 (I) は、「なんか自分からいかないとだめだと思うんです」「何回かはこんにちは一、お散歩ですかー?とかって言うぐらいで、おうとかって言う」と述べた。同研究参加者は、「みなさんなんかこう内向きになるんですよね、気持ち的に。……こんにちは一とかって声かけたら、おうこんにちはとかって言ってなんだかんだって話をするようになるから」とも語った。

②〔人のことに立ち入らない〕

研究参加者 (M) は、「あんまりその人のいろんな過去だとかはほとんど聞かない。向こうが言ったら『うんうん』って聞いて、自分、自分のことは言います」と述べた。研究参加者 (P) は、「(質問者) そういう気を遣っているから、お友達とうまくできるし」と尋ねると、「そうです。土足で人のあれには踏み込まないです」と答えた。

③〔分け隔てがない・イニシアティブをとる人を助ける〕

研究参加者 (S) は、「地元の人がたも、それから他から入ってきた人がたも、割と〔分け隔てなく〕つき合うように心がけていると述べた。そして、フットパスやブナ林で散策したり、山菜を採りに行ったりといった自然を楽しむイベントや、ハーブを一緒にやるといったイベントが多くあるが、そのような、誰かがイニシアティブをとって「何かしたいって言ったら手伝いもしますんで」と語った。

このように、高齢者は人づきあいにおいて、内向きにならず、〔自分から動い〕て声かけなどを行っている。また、〔人のことには立ち入らない〕で、あまり深くないような関係を保とうとしていることがわかる。一方、さまざまなイベント交流では、試行的な動きに協力的になり手

伝おうという意識を持っている高齢者がいた。

#### (10) 【重要な他者の存在】

このカテゴリーは、近くの少数の人との親密な関係が、高齢者の支えになっていることに関係する。自分よりも年配の同じマンションの一人暮らしの人や、マンションの常住している管理人が支えになっていると語る高齢者がいた。

##### ①〔少数の親密な関係〕

研究参加者(C)は、同じマンションの「2階に(90代の人)、ひとりで暮らしているの。上には上、いるんですから。だから、時々ね、何かできないからって電話くるわけ」と述べ、同じ一人暮らしで、20歳程年上の女性と普段連絡を取り合っているという。そして、歩くのが不自由になっても、「タクシー乗ってでも、……買い物に行こうと思う」と述べた。それは、その女性が今でも自分で買い物にしている姿を見て励みになっているからだという。このように、近くの同じ一人暮らしで目上の人との親密な関係が生活の支えになっていることがわかる。

##### ②〔遠くの親戚より近くの他人〕

研究参加者(O)は、出かける際に、マンションの「管理人の奥さんとか旦那さんが玄関におられるときは、どこどこ行ってきますから、って」と声をかけるという。また、病気になったとき、管理人の奥さんが病院にまで連れて行ってくれたという。そして、「(質問者)管理人さんにそこまでしてもらえてっていうのはある意味で珍しいというか、ありがたいですね」と尋ねると、「え、本当にそのとき感じたのが、遠くの親戚より近くの他人ってこのことかなって私そのときふと思いました」と述べた。つまり、子ども家族は同じ道内にいてもすぐには会えない。近くに日々声をかけ合い、いざというときに助けとなってくれる他者がありがたいということである。

このように、高齢者にとって日々の生活で親しくできる少数の他者が近くにいてくれることが、安心した生活のために支えになっていることがわかる。多くの人の集まりだけでなく、〔少数の親密な関係〕を求めている。家族が近くにいない場合、そうした存在は、日々の生活や緊急のとき、〔遠くの親戚より近くの他人〕と言える程にありがたいものとなるのである。

## V. 考察

### 1. 一人暮らし高齢者の精神的状況

配偶者の死別等により一人暮らしになった高齢者にとり、その辛さは〔経験しないとわからない〕ものである。諍いだったり、介護だったりいろいろなことがあったが、その存在がいなくなると、想像以上の喪失感、寂寞感がこみ上げてくる。帰れば家の中にいてくれる人も、いろいろなことを話す相手ももういない。高齢者は突然、一人になった空間に取り残される。そのような死別等の経験後、それまでとは〔生活が変わった〕と語る高齢者がいる。すなわち、不眠になったり、それまで注意してくれる人がいなくなり暴飲暴食になってしまったり、張り合いがなくなって好きな趣味もやめてしまったり、物を多く買うようになったりする高齢者がいる。精神的な衝撃が生活面での変化を生じさせていることがわかる。また、それまで二人でよく行っていた〔思い出の場所に行けなくなった〕と述べる高齢者がいる。そこに行けば楽しい思い出をともにした存在の喪失感を大きく感じてしまうからである。このように、配偶者の死別等の経験によって大きな喪失感を体験する高齢者がいることがわかる。

一人暮らし高齢者の中には、時間とともにそうした〔辛い気持ちが薄らぐ〕と語る者がいた。しかし、そのような辛い気持ちが和らぐことは、必ずしも喪失感が解消されることを意味しない。

気分転換などで辛い感情を〔紛らわすことはできる〕ということである。中には、いずれ一人になることが〔誰もが経験すること〕であると捉え、その現実を受容している高齢者がいる。成島・谷井・出水は「老いと死の受け止め」を、とくに独居後期高齢者女性が孤独感や疎外感に陥らないで一人暮らし生活が成立するための基盤の一つにあげている<sup>11)</sup>。今回の調査でも一人になることは自然なことであるとの受け止めが、生活に新たな一步を踏み出すためのターニングポイントになっていることが確かめられた。ただし、この受容は、紆余曲折をとまなう数年に亘るプロセスを経たものである。しかも、当初の喪失感は解決されるわけではない。突然始まった一人暮らし生活は今でも続いている。またその受け止めには現状と折り合いをつける一種の諦めの感覚があることがある。村上は「諦めの感覚は、私たち人間にとっては極めて大切な価値なのです。おそらく普遍的な価値だと思います。時代を超え社会を超えて人間に必要な賢慮の一つだと私は確信しています」と述べ、諦めの感覚の積極的価値を強調する。時代の風潮としては、自分の欲求や欲望に基づいてあくまで「自分の欲するところを追求」することに価値を置く傾向が強い<sup>12)</sup>。しかし、とくに高齢期は自分の思い通りにならない経験に多く見舞われる時期である。死別等により突然同居家族を失うこともその一つであろう。そうした経験の中で、高齢者の中には、時間経過の中で紆余曲折を経ながら、出来事が自分の欲するようにならないことに対する諦めの感覚とともに喪失を受容することがあると考える。

過去の人生において苦勞した経験を呼び起こすことにより、一人暮らしにおける辛い感情と折り合いをつける高齢者がいる。前回の調査でも過去の生活の苦勞、大きな仕事を成し遂げた記憶が、一人暮らし高齢者の心を支えていることが示された<sup>5)</sup>。今回の調査では、過去に交通事故や脳血管疾患による大きな怪我や病気に見舞われた経験が、現在〔できる範囲のことをする〕心がかげにつながっている高齢者がいることが確かめられた。また、介護や仕事上の苦勞が、今となっては〔人生の財産〕となっており、〔何があっても大丈夫〕という意識につながっていると語る高齢者もいた。ここには等身大の自分を受け入れ、できることから日常を取り戻そうとしたり、過去の苦勞が財産となって、今の大変な状況を乗り越えていけると自分に言い聞かせたりする高齢者の姿が認められる。成島・谷井・出水は高齢者の戦前・戦後の「厳しく辛い体験は、現在の生き方に活かされている」ことを指摘する<sup>11)</sup>。今回の調査でも、過去の経験が現在を受容するための支えになっていることが確かめられたが、その受容は喪失感を乗り越えられるとの自信というよりは、むしろ、できる範囲内でやれることをするといった等身大の自分を受容する姿勢であり、大丈夫と自分に言い聞かせることで喪失感と折り合いをつける姿勢であると考えられる。

## 2. 一人暮らし高齢者の社会生活面

精神面だけではなく、生活面において、高齢者は個人としてさまざまな工夫をしている。畑仕事や絵を描くことやドリルやクイズなど、〔日々の楽しみ〕を見つけ、一人〔家にいても退屈しない〕工夫をしていた。前回の調査でも家の片付けやゲームなどが退屈しのぎになっていることが示された<sup>5)</sup>。さらに今回の調査では、〔仕事があったから救われた〕と語る高齢者がいた。仕事は、喪失感といった一つのことに気持ちが入っていくのを防ぐ意味があると考えられる。この点については、人に役立つとするボランティア活動の意義との関連で、後に考察したい。

一人暮らし高齢者は個人として内面的に現実を受容しようとしたり、生活面において日々の楽しみを見つめたり退屈しない工夫をしているだけではない。他者との関係の中で、一人暮らし生活に徐々に順応するように努めている。むしろ、一人暮らしになって〔おしゃべりの大切さ〕を痛感すると語る高齢者がいる。同居家族がいた頃には、家で何か話をする相手がいた。今は家に一人いて、会話もなく一日が終わってしまう日もある。だからといって高齢者は何か特別な大がかりなコミュニケーションの場を求めているわけではない。〔何気ない話ができる〕ことや、ちょっ

としたことを「気にかけてくれる人がいる」ことがありがたいという。スイスの法学者、思想家であるカール・ヒルティは、老年についての叙述も含む『幸福論』第二巻における人間知についての哲学的考察において、人との最上の関係は、「素朴な、自然な」ものであって、これは何も大きな奉仕ではなく、「ささやかな喜びを与える」ことであると指摘する<sup>13)</sup>。高齢期には、仕事や育児、家事、介護等に追われていた中年期においてよりはむしろ、高齢期には、大がかりな活動の場ではない、ささやかな人の気遣いのありがたさを感じ合うような人間関係の場が増えていくと考える。

### 3. 一人暮らし高齢者の人とのつながり

人はいくつになっても、「人に喜ばれる喜び」を持つ存在であることは、前回の調査でも示された。たとえば、手作業で作ったブックカバーやお菓子を人に渡して喜んでもらうことに満足している高齢者がいた<sup>5)</sup>。今回の調査でも、道ばたにあるゴミや枯れ葉を拾っていて、「いつもきれいにしてもらってありがとう」と言われたことがうれしいと語る高齢者がいた。また、無料で人に習い事を教える高齢者がいた。ここには、喪失感を抱える高齢者が「仕事があったから救われた」という前述の語りと併せて、高齢者の社会参加・社会貢献の意義の一端が認められると考える。藤原は、高齢者の社会参加活動を、①就労②ボランティア活動③自己啓発（趣味・学習・保健）活動④友人・隣人等とのインフォーマルな交流⑤要介護期の通所サービス（デイサービス）利用の5つの段階に分類し、男性はとくに「現役時代から……仕事だけで社会とつながっている」ことが多いため、仕事を通じての社会参加を促す意義を強調する<sup>14)</sup>。今回の調査でも仕事やボランティア活動には、喪失感を緩和する意義や、いくつになっても認められる「人に喜ばれる喜び」をもたらす意義があることが確かめられた。ただし、「仕事があったから救われた」とする女性の語りや、ボランティア活動に喜びを見いだす男性の語りもあったことから、就労とボランティア活動に対する明確な性差は認められなかった。一方、高齢者の社会参加・社会貢献のさまざまな場面における「若い世代との交流」の意義は強調されるべきだと考える。

高齢者は、人とのつながりにありがたさを感じたり、喜びを見出す経験だけをしているわけではない。いじめなどにより疎外感を感じたり、「文句を言われ」て活動意欲をなくしたり、病気が機縁となって人との集まりがなくなる経験をすることもある。長谷部・小池・深谷・野中らは、「一般他者と居住地域への信頼と互酬性が……高いことが生活状況や精神的健康の良好さと関連する」とし、とくに「一人暮らし高齢者においては、健康維持や孤立防止のために、社会参加等を通じた地域互酬性の醸成が求められる」と指摘する。そして、専門職等の介入の必要性が説かれている<sup>15)</sup>。本研究においても、健康増進運動を通じたNPO法人による地域支援活動や、自治体によるさまざまなイベント交流の場の提供が、高齢者の人とのつながりのきっかけ作りや拡がりの契機になっていることが確かめられた。こうした場の提供や声かけといったきっかけ作りとしての専門職等にある者の役割は重要であると考えられる。

高齢者は元々近所に暮らしていた人たちや人生の核となる趣味や仕事上の「以前からの知り合い」から、人とのつながりを見いだしている。また地域における運動教室や自治体の主催する「サークルに参加する」ことで、知り合いを見出したり、つながりを広げている。また、自分たちで料理の「サークルを作った」と語る高齢者もいた。このように高齢者はさまざまなきっかけで人とのつながりを見つけている。その際、最初のきっかけ作りが重要であると考えられる。それは最初に集まった人たちのアイデアから始まることもあるし、専門職に就く人がイニシアティブをとることもある。能動的に働きかける人たちとそれに関心を寄せたり協力したりする人たちの相互作用によってつながりが築かれている。中には、こころのどこかで人とのつながりを持ちたいと思いつつ、そのきっかけを見出せない人たちもいるだろう。最初の働きかけや声かけがあ

れば参加しやすくなると考える。

そうした人とのつながりの中で、高齢者はさまざまなことを心がけている。〔自分から動いて〕挨拶をしたり話しかけたり、集まりの中でも人の過去のことや内情などに〔立ち入らない〕ようにしている。また他の地域から来た人や新しい人などを区別せず〔分け隔てなく〕接するようにしている。そして、あるアイデアやサークル作りやイベントを率先して手がけようとしている人がいたら、協力的になろうと心がけている。人とのつながりはこうした高齢者の心遣いによって形成、維持され、拡張している。

高齢者は多くの人との交わりを求めているだけではない。一人でも二人でも近くに〔親密な関係〕を持てる人がいることをありがたいと思っている。そうした身近な人が、毎日の生活や緊急のときには〔遠くの親戚より近くの他人〕と言える程の存在になっている。前回の調査でも、夫を亡くしてから同居していた姑や、何でも言い合える義姉が支えになっていたり、自分の家にとときどき来る同じ境遇の人が支えになっていることが明らかになった<sup>5)</sup>。今回の調査では親戚や元々の知り合いではない他者が、一人暮らしになってから重要な存在になることが認められた。

#### 4. 結論

以上の叙述から、一人暮らし高齢者は、自己との関係、及び他者との関係に取り組みながら、その都度置かれた状況に対して、紆余曲折を経ながら対応していることが明らかである（図1）。そのプロセスには、個人か共同体かという二元的対立軸では描写しきれない交渉の跡がうかがえる。死別後の喪失感は解消されるのではなく、喪失した対象の存在の面影を残しながら受容されていく。またその受容のプロセスには、自分個人だけではない、人間がいずれ経験することになる状況へ思いを寄せる姿もある。過去を振り返るときも仕事や介護における他者との関係に思いを寄せながら、今の状況に向かい合っている。ひとりで内面的にさまざまな感情と折り合いをつける際に、他者との関係の跡が認められるのである。人との共同体を形成していくプロセスにおいても、その発端となるコミュニケーションの大切さの自覚は、自己の内面から生じたものといえる。人に喜ばれようとして道ばたのゴミを拾う姿勢には自発的な意思が認められよう。また、自分たちでサークルを作ろうとしたり、自分から動いて挨拶や声かけをする様子にもきわめて自

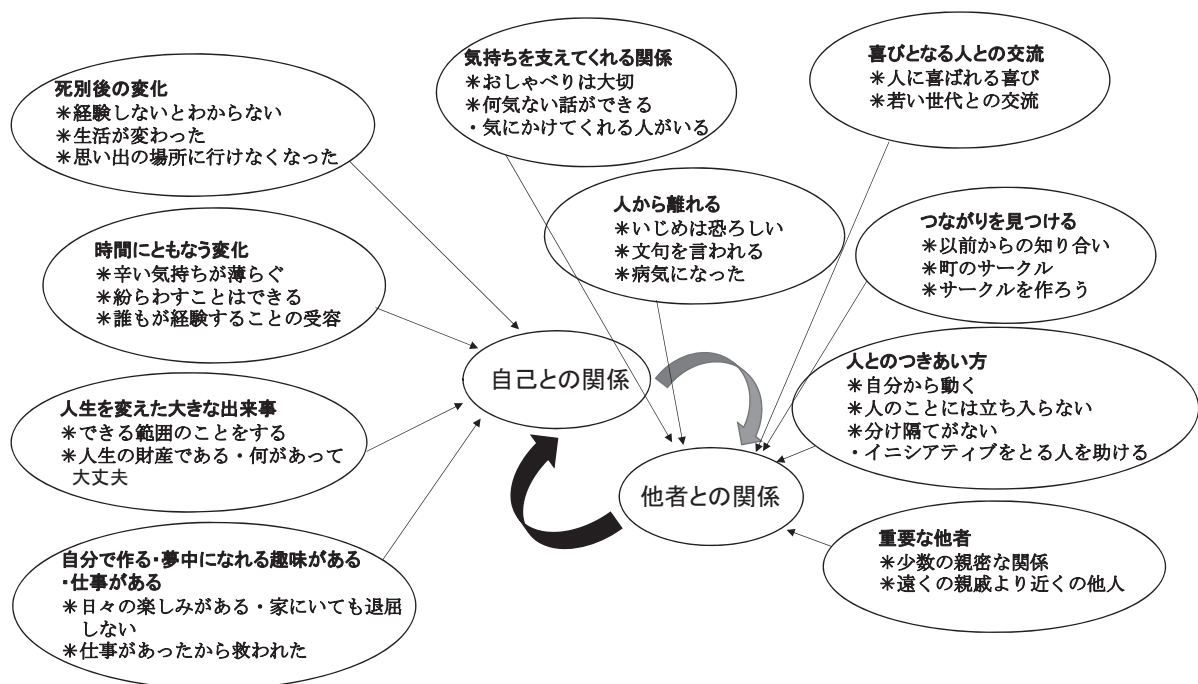


図1 高齢者の一人暮らしを支えている精神的・社会的状況の構造

発的な姿勢が表れている。個人との関係の中に他者の存在があり、他者との関係のプロセスにおいて、内面からの自発的意思の表れが認められるのである。したがって、個人における作業と共同体への作業のプロセスは混合しており、前者に他者の存在との関係が、後者に個人の自発的意思の表明が認められると考える。

## VI. まとめと今後の課題

一人暮らし高齢者は、まず自己との関係においては、内面的に感情と折り合いをつけたり、過去を振り返ったり、一人暮らしの生活においてさまざまな工夫をしたりして、時間経過とともに一人暮らしの現実を受容しようとしている。自己との関係において、【死別後の変化】、【時間とともになう変化】、【人生を変えた大きな出来事】、【自分で作る・夢中になれる趣味がある・仕事がある】というカテゴリーがある。死別後の喪失感や寂寥感は当事者にとっても〔経験しないとわからない〕程、想像を超えたものである。そうした死別後の辛い時期、不眠、暴飲暴食、趣味を止める、物を多く買うといったように〔生活が変わった〕高齢者がいる。また、そこに行けば喪失感を高めてしまう〔思い出の場所に行けなくなった〕者もいる。一方、時間とともに、こうした〔辛い気持ちが薄らぐ〕様子がうかがえる。ただし、それは喪失感が解消されるのではなく、その感情と折り合いをつけながら〔紛らわすことはできる〕ということである。〔誰もが経験すること〕という死生観を基に、気持ちに折り合いをつけることもある。過去の事故や重い病気にかかった経験から、現在の等身大の自分を受け入れ、〔できる範囲のことをする〕として、日々の生活の一つ一つに取り組む姿が認められる。また、介護や仕事上における過去の大変な経験が〔人生の財産〕となって今の状況を受け入れる要因になったり、〔何があっても大丈夫〕との意識につながる様子が認められる。高齢者は、内面においてだけでなく、一人暮らしの生活においてさまざまな工夫をしている。畑仕事、絵を描くこと、漢字ドリル、クイズなどをやり〔日々の楽しみがある・家にいても退屈しない〕工夫をしている。また、辛い感情に囚われないようになったり、生活のリズムができたりといったように、〔仕事があったから救われた〕と語る高齢者がいる。

他者との関係においては、【気持ちを支えてくれる関係】、【喜びとなる人との交流】、【人から離れる】、【つながりを見つける】、【人とのつきあい方】、【重要な他者】というカテゴリーがある。一人暮らしになって〔おしゃべりは大切〕であることを痛感し、〔何気ない話ができる・気にかけてくれる人がいる〕ことのありがたさを感じる。人はいくつになってもボランティア活動などの〔人に喜ばれる喜び〕を感じる。とくに〔若い世代との交流〕に生きがいを見いだす。一方、〔いじめ〕や〔文句を言われる〕ことや、〔病気〕のため人から離れていく様子もうかがえる。人とのつながりにおいては、友人、知人といった〔以前からの知り合い〕、専門職にある人が運営する運動教室や、自治体が企画するさまざまな〔町のサークル〕だけでなく、自分たちで〔サークルを作った〕りする姿勢も認められた。人とのつながりを作り、維持し、拡張するためには、〔自分から動く〕能動的姿勢、〔人のことには立ち入らない〕ようにしたり、〔分け隔てなく〕接触しようとしたり、率先して活動する〔イニシアティブをとる人を助け〕ようとしたり、他者へのさまざまな配慮がなされている。一方、多くの集まりだけではなく、〔少数の親密な関係〕や日々の生活や緊急のときに支えとなる存在を〔遠くの親戚より近くの他人〕としてありがたく感じている姿も認められた。

高齢者が一人暮らしに生活に順応していく過程において、内面的に個人との関係においてさまざまな工夫をするだけでなく、そのプロセスには他者との関係の跡が認められる。また共同体形成の道筋の中で、他者からの影響に反応するだけでなく、自ら一步踏み出そうする自発的意

思表明の姿が認められる。高齢者は、独立した個人としての生活と共同体のメンバーとしての生活において、相互流入的な複合的な関係を続けながら、一人暮らし生活に順応していこうとしているのである。こうした知見は、これまでの共同体的視点からのみ行ってきた研究<sup>4)</sup>からは得られなかった知見である。

北海道の比較的広範な地域の研究参加者を対象として実施した今回の調査研究では、一人暮らし高齢者の中には比較的元気な人たちもいるいっぽう、なお孤独に苦しむ人たちが存在することも明らかとなった。したがって、高齢者が抱える孤独の要因や種類などをより具体的に提示することだけでなく、孤独の様態を地域差や性差などの面から比較分析することも必要になるものと考えられる。今回の結果をもとに比較対象となる新たな調査地や調査対象者を設定し、上記の解明を進めることが今後の課題である。

## 謝辞

本研究にご協力いただきました研究参加者の皆様、施設の皆様に深く感謝いたします。また、本稿は、第278回「関東医学哲学・倫理学会」総合部会例会（2018年11月10日）、及び第30回「日本生命倫理学会」年次大会公募シンポジウムの発表（2018年12月9日）における会員の議論からいくつかの着想を得ています。

本研究は、2016～2018年度文部科学省科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究（C）課題番号16K04075 研究代表者：船木祝）の助成によるものである。

## 注

注1 参考までに、船木（2018）<sup>4)</sup>での識別番号と本論文との対応を追記する。

本論文の研究参加者（C）＝船木（2018）での研究参加者（A）

本論文の研究参加者（O）＝船木（2018）での研究参加者（B）

本論文の研究参加者（J）＝船木（2018）での研究参加者（C）

本論文の研究参加者（L）＝船木（2018）での研究参加者（D）

本論文の研究参加者（K）＝船木（2018）での研究参加者（E）

本論文の研究参加者（N）＝船木（2018）での研究参加者（F）

本論文の研究参加者（R）＝船木（2018）での研究参加者（G）

本論文の研究参加者（P）＝船木（2018）での研究参加者（H）

本論文の研究参加者（M）＝船木（2018）での研究参加者（I）

本論文の研究参加者（A）＝船木（2018）での研究参加者（J）

注2 テイラーとヌスバウムによる共同体形成問題に関する哲学的考察については、以下の文献4)を参照。

## 引用文献

1) 朝日新聞, 2018年4月27日朝刊.

2) 朝日新聞, 2018年1月4日朝刊.

3) 国立社会保障・人口問題研究所: 日本の世帯数の将来推計(全国推計), 2018.

4) 船木祝: 共同体形成の困難な社会——高齢者との関連において——, 北海道生命倫理研究,



- 6 : 1-12, 2018.
- 5) 船木祝, 山本武志, 旗手俊彦, 栗屋剛: 高齢者の一人暮らしを支えている精神的・社会的状況. 北海道生命倫理研究, 3 : 13-26, 2015.
  - 6) 船木祝: 独居高齢者の社会的・精神的状況に関わる倫理原則の一考察. 北海道生命倫理研究, 2 : 10-19, 2014.
  - 7) 船木祝: いま生命倫理学において求められる人間像とは. 総合人間学会編『戦争を総合人間学から考える』(所収), 学文社, 154-163, 2010.
  - 8) 長島隆: 「バルセロナ宣言」とユネスコの「生命倫理と人権に関する宣言」に関する「4原則」. 盛永審一郎, 松島哲久編『医学生のための生命倫理』(所収), 丸善出版, 22-23, 2012.
  - 9) 廣瀬春治, 杉山沙耶花, 武内あや, 馬場崎未絵: 独居高齢者の生きがいに関する研究. 山口県立大学学術情報, 2 : 26-31, 2009.
  - 10) グレック美鈴, 麻原きよみ, 横山美江編著: よくわかる質的研究の進め方・まとめ方 看護研究のエキスパートをめざして. 東京: 医歯薬出版株式会社, 69, 2007.
  - 11) 成島ますみ, 谷井康子, 出水美菜子: 独居後期高齢者のサクセスフル・エイジングに関する研究—北海道オホーツク圏在住の高齢女性の場合—. 日本赤十字北海道看護大学紀要, 13 : 35-44, 2013.
  - 12) 村上陽一郎: あらためて教養とは. 東京: 新潮社, 251, 2009.
  - 13) Carl Hilty: Glück, Vol. 2, London: Forgotten Books, Read online Download PDF Purchase in print, 105, 2018 (<sup>1</sup>1907). ヒルティ著, 草間平作, 大和耕太郎訳: 幸福論. 第二部, 岩波書店, 118-119, 1962.
  - 14) 藤原佳典: 地域のつながりと男性高齢者—社会的孤立を予防するポイント—. 保健師ジャーナル, 73(05) : 389-395, 2017.
  - 15) 長谷部雅美, 小池高史, 深谷太郎, 野中久美子他: 一人暮らし高齢者における他者への信頼と互酬性に関する個人の認識と健康との関連. 厚生学, 62(4) : 9-16, 2015.